

日本武尊の西征Ⅱ

熊襲は集団名です。その首領の名は取石鹿文とくしかやです。またの名は川上タケル(梟帥)といひます。小碓尊(日本武尊)と熊襲との戦いが伝えられているのは九州宮崎県、佐賀県、鹿児島県です。それぞれの地方に伝承地があり、その内容は具体的なものです。本当はどこで戦ったのかはつきりしません、あるいは川上タケルは複数いたのが。しかし、どの伝承も宴会で征伐されたことになっているため、その地は何か所に絞られねばならないはず。西征Ⅱでは宮崎県の伝承地を紹介します。

熊襲征伐の中心地は

宮崎県だった



九州北部の港から出航した小碓尊は九州の東側の海岸に沿って海路で南下しました。そして、船を宮崎県延岡市の北川河口にある東海の港に着岸させ、そこから西にある山の方に向かいました。北川は大分県から宮崎県延岡市内を流れ、東海で五ヶ瀬川

と合流します。ここは昔から交通の要衝で河川を利用して船で多くの荷物が出入りしていたと伝えられています。

日本武尊が上陸した時は日没に近かったのですが



日はしばらく西の山の端にかかって沈みませんでした。日本武尊はこの山が馬に乗るとききの膝ひざという馬具の形に似ているとして「行藤山」と名付けました。また、行藤山の雄岳と雌岳の間にある滝の落ちるくぼみが矢筈やはずに似ているとして「矢筈の滝」と名付けました。水の落ちる姿は白布を引くようにも見えるため「布引きの滝」とも呼びました。

行藤山麓に至った小碓尊はここを滞在地と決めました。

行藤山には都で熊襲と呼ばれていた川上タケルという者が住んでいました。タケルは里の人々から食べ物などを奪って生活していました。これを知った天皇は小碓尊に命じてタケル征伐に遣わしたのです。

小碓尊は行藤山に近い舞野村に滞在することにし、野添といつとく居を構えました。そして、ここに7日間滞在し、川上タケルを討つ作戦を考えました。

この後は九州各地に伝わる熊襲征伐の内容とほぼ同じです。

川上タケルは親族を集めて新築祝いの宴会を開こうとしていました。そこで、小碓尊は髪をほどき、童女の姿になって密かに宴会にもぐりこみました。

宴会を楽しんでいた川上タケルは女たちの中にひととき目立つ童女の姿を見つけ、手を取って隣に座らせました。そして、お酒を飲みながら戯れていました。この時とばかりに小碓尊は衣服の裏に隠し持っていた剣を抜き、川上タケルの胸を刺しました。その後、弟彦に一族の討伐を命じ熊襲を全滅させました。

小碓尊は日本武尊と改名し、豊後国(大分県)に帰っていききました。里人たちは日本武尊が滞在していたところを武宮と呼びました。

行藤山周辺には熊襲征伐に関連した伝承が多くあります。



舞野神社(下舞野神社) 宮崎県延岡市舞野町

行藤山にある矢筈の滝は幅約三十メートル、高さ約七七メートルあります。日本武尊は滝を見て「布引の矢筈の滝を射てみれば川上タケル落ちて流れる」と詠みました。これは神楽歌として延岡市の舞野神社に伝わっています。日本武尊は熊襲建と戦うために舞野に七日間滞在して作戦をたてました。熊襲との戦いに勝利した日本武尊はここで祝宴を催したと伝えられています。

たとえられています。この時、舞が披露されたので境内には舞に関係がある扇塚が建てられています。



年の杜 宮崎県児湯郡川南町平田

平田神社境内の案内板には以下のように書かれています。

「由緒 創立年代は不詳なるも古老の口碑によると日本武尊熊襲征伐の為西下されし時幣田川（現平田川）川口の伊食より御舟にて川を上がられ川岸の年の森に舟を寄せ給い現社地の東南の高台（現在濠跡が存す）の御山に宮居を定め暫しこの地に留まれ熊襲征伐の後再び立寄られた。」

この社伝により、小碓尊は行藤山での戦いの後、海路と陸路に分かれて南に進んだと推測でき、神社付近に上陸しました。

小碓尊らは平田神社近く、川岸の「年の森」に着岸、高台の御山に宮居を定めて滞在しました。この御山が征西軍の拠点となりました。当時はこの付近に海岸があったとされています。

地元の伝承では、大和に戻る際もここに立ち寄ったと伝えられています。

剣を埋めたところ



宮崎県国富町の本庄稻荷神社（写真 剣柄稲荷神社）は古墳の上に建てられた神社です。ここに小碓尊が熊襲師を刺し殺した剣を埋めたといわれています。

まつろわぬ者たち

朝廷に逆らう「まつろわぬ者たち」には鬼や悪神など怖いイメージがついていますが、彼らは大和朝廷に抵抗する者たちであり、征伐すべき敵だったからです。逆の立場から見れば、朝廷こそが彼らの敵です。彼らは侵攻してきた朝廷軍から故郷を守り、朝廷支配を許さない強い意志を持ったリーダーたちです。記紀は朝廷側の立場に立つて書かれており、その中では「賊」であつても実際の姿は記述されている内容とは異なつていたとも思われることがあります。

岡山県に伝わる温羅と呼ばれる者が吉備の人たちを苦しめていたことから大和朝廷に助けを求めました。そこで、吉備津彦らを派遣して温羅を征伐しました。これは吉備地方に伝わる桃太郎の鬼退治伝説となつています。実は温羅は吉備のリーダーであり開拓者だったという説もあります。また、日本武尊の東征で登場する房総半島の悪久留王も朝廷に抵抗を続けた賊ですが、千葉県君津市では六手王と呼ばれており、民の信望が厚かったと伝えられています。

『古事記』

父は弟の小碓命に、食事の席に出るように兄を諭してくるよう命じました。そこで、小碓命は早々に兄と会います。しかし、それでも大碓命が顔を出さないで、父が小碓命にどのように諭したのかをたずねました。すると、小碓命は「朝、兄が廁（かわや：便所）に入ったとき、手足をもぎ取り、体を薦

（こも「菰」 わらを編んで作ったむしろ）に包んで投げ捨てました。」と答えました。

天皇は小碓命の荒々しい性格が恐ろしくなり小碓命を呼んで「西方に二人の熊襲建がいて天皇の命に従わない無礼な奴らだから征伐してきなさい」と命じました。

小碓命は叔母の倭比売命から御衣と御裳をもらい、懷に短剣を入れて出かけました。倭比売命は伊勢神宮で天照大神を祀っていました。

九州の熊襲建は大きな家を新築したところで、新築祝いの宴が催されることでした。家の周りは軍が三重に取り囲んでいて、室を作っていました。そして宴会の食事の準備をしているところでした。そこで、宴会が開かれるのを待つことにしました。

祝宴が開かれることになった日、小碓命は少女のように髪を結び、叔母の倭比売命からもらった衣を着て宴にいる女たちの中に紛れ込みました。熊襲建兄弟は美しい娘をみつけると間に座らせました。この時、小碓命はここぞかりに懷に持っていた短刀で兄の胸を一気に刺して殺してしまいました。それを見ていた弟の建は外に走って逃げようとしたが部屋の下に追い詰められ、小碓命は弟の背中の皮をつかみ、刀を尻から刺しました。弟は息絶える前「まだ刀を抜かないでください。あなたはどなたですか。」と尋ねました。小碓命は「我は大帯日子淤斯呂和氣天皇の子で名は倭男具那王だ。おまえたちが命令に従わないと聞いておまえたちを殺せと命じられて来たのだ。」と答えました。熊襲建がまた言いました。「西方には自分たち兄弟より強い者はいないと思っていましたが大倭国にはいたんですね。できるならば、建の名（「建」は勇敢な者という意味を持つ）を献上したい。これからは倭建御子と名乗ってほしい」と言いました。



日本武尊像 千葉県木更津市

小碓命は完熟した瓜を切るように刀を振りおろして殺しました。小碓命はこの倭建建命と改名しました。